

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

***堂平観測所ベーカーナンシュミットのフィルム3本を発見**

国立天文台天文情報センターでは、旧図書館に収蔵されていた写真乾板などの整理を行っている。この写真乾板の中には100年以前の乾板が発見されるなど貴重なものが発見されている。収蔵されている写真乾板のうち、堂平観測所関係のものは大島紀夫氏が、ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板、明らかに由来の分かった天体写真乾板については佐々木五郎氏が整理している。筆者は由来が知れない乾板、フィルムなど雑多な写真乾板、フィルム、写真などの整理を引き受けている。

今回は筆者に渡された中にあったブローニ版フィルムが入った3個の缶(写真1)の報告である。3個の缶には、それぞれに「64VII エコー同観」、「64VII エコー同観」、「64VII エコー同カン」と書かれていた。「64VII」とは1964年7月、「エコー」とはエコー衛星のことであろう、「同観」とは同時観測のことであろうことは想像がついた。ということは49年前ほぼ半世紀前のフィルムである。



写真1

3個の中には、ブローニ版のフィルムが1巻ずつ入っていた(写真2)。



写真2

このフィルムはにわかには何だかよく分からなかった。時計のようなものが焼きこまれ、棒状に移った像（写真3）があり、その像がセクターで切られており（写真4）、写野には星像も写っていたので、もしかして人工衛星追跡カメラで撮影したものではないかと思われた。そこで堂平観測所で、ベーカーナンで観測していた西野洋平氏を訪ねた。氏は言下にこれはベーカーナンシュミット望遠鏡でと要られたエコー衛星の写真であると断言された。しかし、このフィルムは西野氏が観測する以前の様式のものであった。



写真3

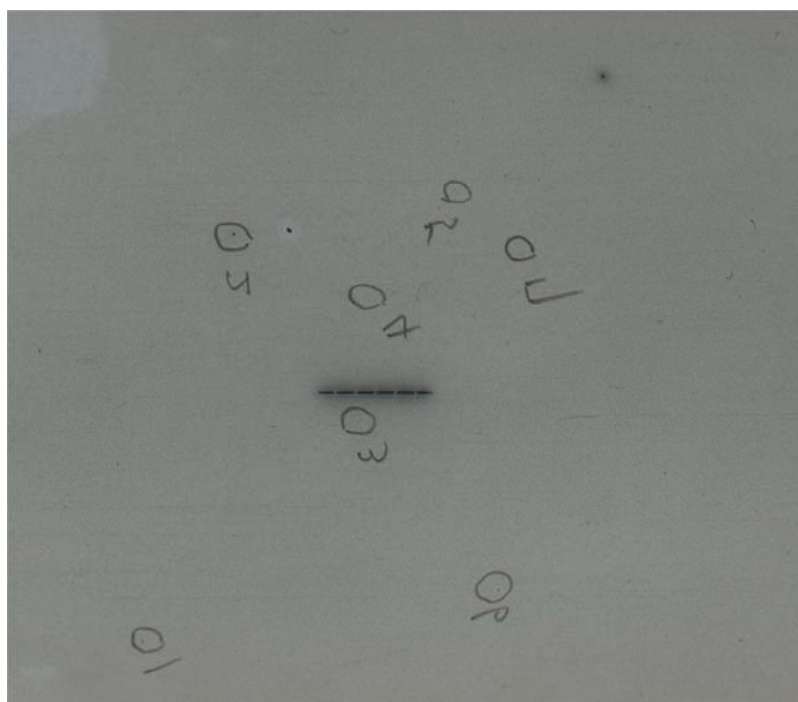
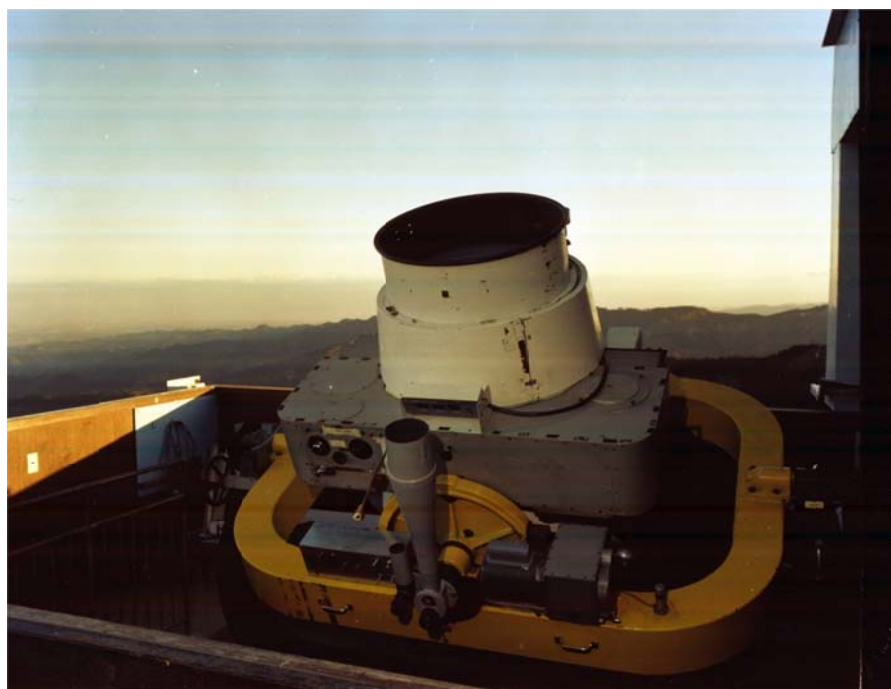


写真4

ベーカーナンシュミットカメラは、スミソニアン研究所が日本に持ち込み、人工衛星の軌道を決めるために人工衛星の追跡観測をしていたもので、そのフィルムはすべてスミソニアン研究所に送っていたから日本にフィルムが残っているとは思っていなかったそうである。通常は人工衛星を点像に撮影するため、星像が線状になるので、このフィルムはスミソニアンに委託された観測ではないので、日本に残っていたものと推測された。貴重なフィルムが発見されたことになる。

ベーカーナンシュミットカメラは、当初は三鷹に設置されていたが、堂平観測所が開設され、堂平観測所に移設された望遠鏡である（写真5）。



これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp